

図1-4 アユのグルゲア症とその病原体である Glugea plecoglossi の孢子。

図1 微孢子虫 Glugea plecoglossi 寄生による“グルゲアシスト”が、皮膚、
軀幹、鰭、鰓蓋、櫛状歯、生殖巣に重篤に多数形成されているアユ。

図2 G. plecoglossi の“シスト”が腹腔内の生殖巣、蓄積脂肪組織、腹膜、肝臓
に多数形成されているアユ。

図3 G. plecoglossi 生鮮孢子の顕微鏡写真。“シスト”の直接おしつぶし標本
で、水中に懸濁させた標本より少し細い。

図4 ブアン氏固定液で固定し、ハイデンハイネ氏鉄ヘマトキシリンで染色した孢子
のスケッチ。

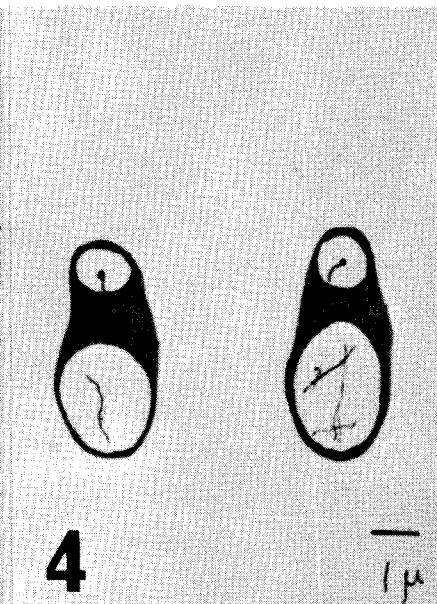
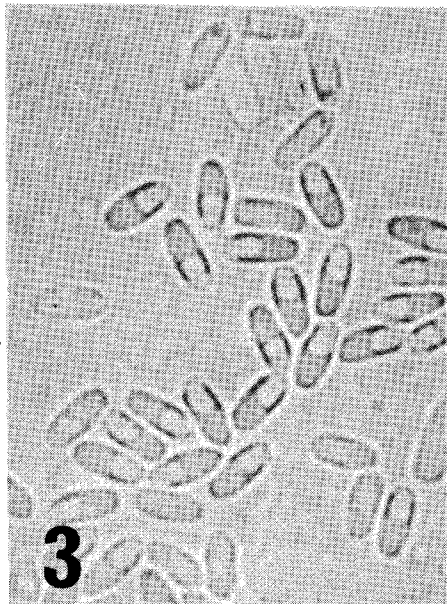
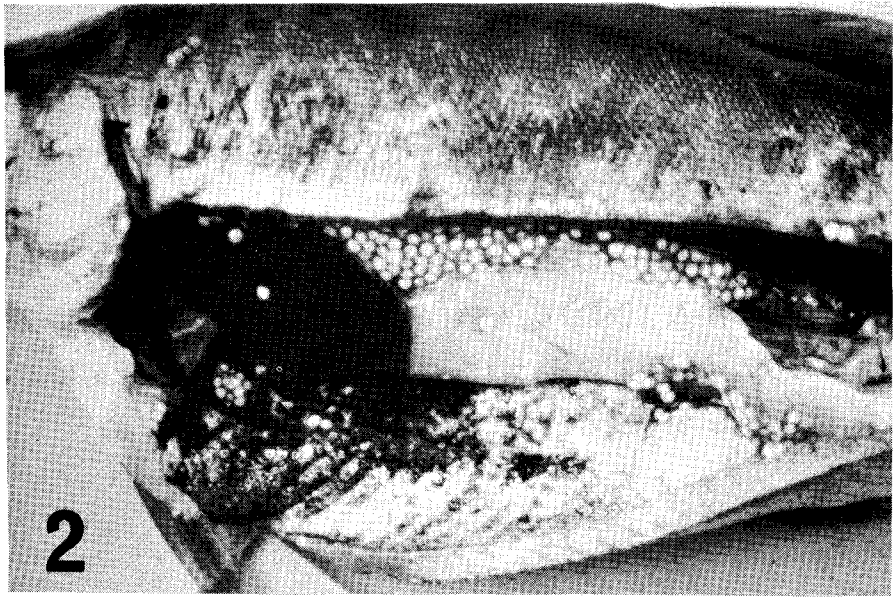
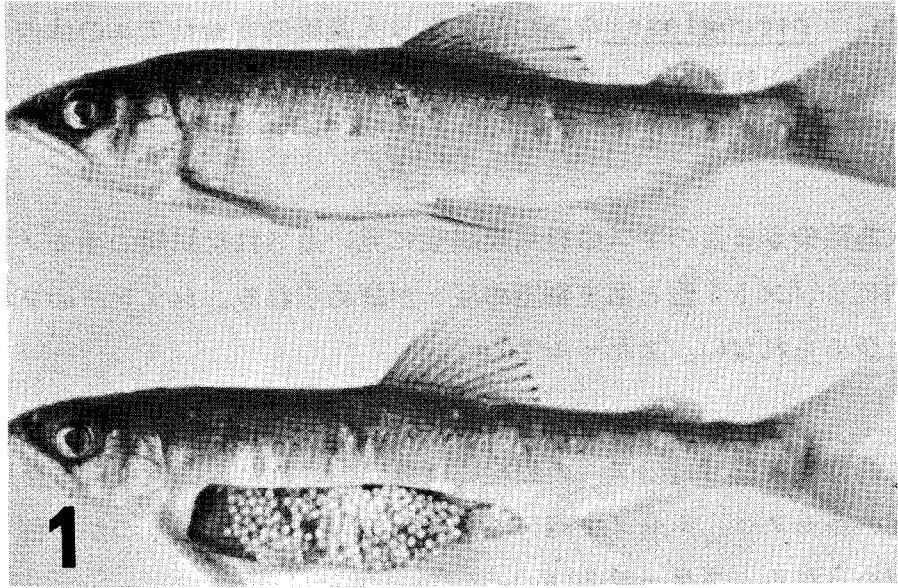


図5-8 G. plecoglossiを経口法により人為感染させたアユの体内でのキセノマの発育と移動。ブアン氏液固定，ヘマトキシリン・エオシン染色。

- 図5** 人為感染5日目のアユの腸粘膜組織に見いだされた初期のキセノマ。キセノマ内にシゾン1個と宿主細胞の核とが認められる。シゾンのまわりに“空胞”は認められない。スケール20 μ 。
- 図6** 人為感染後12日目のアユの腸組織に見いだされた，腸管壁より腹腔へぬける真前のキセノマ。キセノマ内にいくつかのシゾンといくつかの宿主細胞の核が認められる。スケール20 μ 。
- 図7** 幽門垂の壁に認められたキセノマ。すでに宿主由来の被膜形成が認められる。感染後12日目。スケール10 μ 。
- 図8** 経口感染後のキセノマの発育と移動の模式図。極糸の弾出とスポロプラズムの腸管上皮への注入（仮説）。粘膜固有層から粘膜下組織，環走筋肉層，縦走筋肉層を通りぬけ，腸間膜または腹腔内に位置して，宿主反応による被包化をうけて，移動性がなくなると共に肥大して“シスト”となる。

